

三畳一間風呂無しライフ

2002年の五月のある日、当時まだ学生だったボクは神楽坂のアパート・一水寮に住み始めた。魚屋さんの先の細い道を入っていくと、時間が数十年前に止まってしまったような路地に迷い込む。その先にある木造二階建てアパート、それが一水寮だ。

三畳一間、共同台所、共同トイレ、風呂無し。引っ越した当初は友人達に、『めぞん一刻』にでてくる一刻館に勝るとも劣らないスペックだ、と自慢していた。いざ住み始めると様々な試練が待ち受けていたことはいうまでもない。まず夏の暑さと冬の寒さである。ヒートアイランド現象に加えて、クーラーなどという文化的なものが無い一水寮の夏は至って厳しく、トタン屋根の直下にあるボクの部屋は朝の7時以降は眠ることを許さない室温に達し、日中の一番アツい時間帯には40度近くにまでなるのだ。そこまで熱せられた室内は夜になっても30度以下には下がらない。冬になれば冬になったで、すきま風がスースー入ってくる部屋の朝の室内温度は外気とあまり変わらない。そして一番つらいのが、お湯がでないということで、真冬に真水で食器洗いをしていると心臓がキューンときてしまうのだ。

こんな季節の移り変わりがイヤというほど分かる一水寮にあって、新たなる敵の存在に気がついたのはいつの頃からだっただろうか？ ネズミである。そこかしこに隙間があるこの建物は、都市生活に大いに適応したこの小動物の侵入を容易に許してしまう。出しっぱなしにしていた食べ物は齧られたり、三角コーナーの生ゴミが荒らされたり、最初はそれでもその姿を目にする事はあまりなかったのだが、こちらの消極的な態度をいいことに彼らの行動はどんどん大胆になっていくのである。ついには人間様がいるにもかかわらず堂々と姿を見せるようになったのだ。今までに何度も肃正を行ったのだが少し経つと新手が姿を見せるといった状態で、まさにイタチごっことはこのことである。しかし不思議と真冬には姿を見せなくなるのだ。流石のネズミもこんなに寒い所にはいられないということだろうか。それはそれでちょっとムッとする。

いろいろと苦労は尽きないのだが、しかし一日の終わりに行く銭湯は実に心地よい時間を提供してくれる。ボクがよく使うのは銭湯は最寄りの第三玉乃湯と飯田橋方面にある熱海湯である。お湯に浸かりながら高い天井を見上げているとそれはもうゴクラクゴクラクというやつである。湯上がりの火照った体で

夜風に吹かれながらあるく神楽坂の少し狭い路地、それは少なからず物語的な雰囲気を味わわせてくれるのであった。

2006年の九月のある日の晩、飯田橋方面から神楽坂を上っていた。取り壊し間近の一角にあって、喫茶店パウワウだけが灯をともしていた。町は少しずつ姿を変えていく。はたして狭い路地はのこるのだろうか？ ボクは一水寮へ歩みを速めた。